

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530213

研究課題名(和文) 戦前日本におけるマルクス主義の教養化と大衆化 その文献史的研究

研究課題名(英文) How Marxism became popular among the Japanese intellectuals and masses before World War II - A historical study on the publication of Marxist literature

研究代表者

久保 誠二郎(Kubo, Seijiro)

東北大学・経済学研究科(研究院)・博士研究員

研究者番号：80400216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：戦前日本におけるマルクス主義の普及を、主にその出版史から考察した。研究成果として、1800点以上にのぼるマルクス主義文献を収録する文献リストを作成するとともに、学術あるいは社会運動を背景とする啓蒙書を探索、調査して特徴づけた。加えて、一部ではあるが社会主義文献への発禁処分の実効性を『出版警察報』(内務省秘密資料)から数値で明らかにするとともに、マルクス主義の普及と検閲に関する新たな課題を得た。

研究成果の概要(英文)：The author studied how Marxism became popular among the Japanese intellectuals and masses, chiefly by tracing the publication history of socialistic literature. As the results, (1) I revised a reference list of over 1,800 Marxist materials and discovered some more from the scenes of academic and social movements, (2) revealed the effectiveness of the censorship by examining "Shuppan Keisatsu Hou" (reports on publication control - secret materials of the Department of the Interior Affairs), and (3) gave some consideration on the characteristics of spreading of and censoring on Marxist literature in the prewar era, as well as the issues for the future research.

研究分野：社会思想史

キーワード：マルクス主義普及史 マルクス経済学 資本論 共産党宣言 大正昭和 発禁 出版史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(以下、筆者)は、戦前におけるマルクス主義普及史研究に取り組む中で、大原社会問題研究所で作成された文献目録『日本マルクス主義文献』(1929年作成、未刊行、原文ローマ字、ドイツ語、採録時期1919-1927年)の翻刻をおこなう機会を得た。同目録の採録点数は909点にのぼり、戦前のマルクス主義出版物が大量に刊行されたことを改めて確認した。筆者は、この目録以外のマルクス主義出版物をも独自に収集を進め、これら膨大なマルクス主義出版物の存在は、研究史に次の2点の課題を提起するものと考えた。

第一に、当時の思想統制下でマルクス主義思想は弾圧されたが、その程度は一様ではないことを刊行の事実が裏付けていること。

第二に、戦前では実践目的ではなく、研究目的であればマルクス主義の出版は許容されたとの印象があるが、実際の刊行物は多様であること。

後者の意味は、研究書の範疇に入らないような出版物、例えば『誰にもわかるマルクス資本論』(樋口麗陽、1919年)等の啓蒙書、入門書の存在を指している。従来の普及史研究では、マルクス主義を学術と実践運動の二面から分析し、それらの資料を用いるが、こうした啓蒙書は研究の俎上に乗ることがほとんどなかった。しかし、啓蒙書や入門書は、マルクス主義を受容した中核となった学生・知識人層はもちろん、より広い人々とマルクス主義とを繋ぐ役割を担ったはずである。

こうした問題意識から、戦前におけるマルクス主義普及を、その出版史から捉える着想を得た。さらに諸種の啓蒙書の「色合い」から、社会への普及の考察に際して二つの観点を持つことになった。ひとつには学術を背景として浸透する「教養化」の位相であり、ふたつには実践運動を背景とするマルクス主義思想の啓蒙・普及の位相である。後者を「大衆化」とした。

このような問題意識から、戦前のマルクス主義の出版を、特に啓蒙書、解説書、入門書等に着目し、その収集と分析を行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

申請時の目的は次の3点である。

(1) 啓蒙書の理論内容と水準を明らかにする。これは以下の課題となる。

啓蒙書の探索と内容精査

新聞(紙面)調査

(2) マルクス主義学習の教程化の様相の解明

(3) マルクス主義普及のアプローチ比較

3. 研究の方法

(1) 研究目的(1)については、啓蒙的なマルクス主義出版物を見つけ出すために網

羅的な文献リストの作成が必要である。研究開始当初に想定した方法を見直していき、最終的に次のような方法で目録を作成した。

わが国を代表する二つの所蔵情報データベースであるCiNii(国立情報学研究所)とNDL-OPAC(国立国会図書館)、さらに戦前のマルクス研究の拠点というべき大原社会問題研究所(現法政大学附属)の「和書データベース」を基礎として、「マルクス」「エンゲルス」「レーニン」「スターリン」「共産主義」「社会主義」等のキーワードで検索をかけ、得られたタイトルから重複を除いてリスト化するということである。

この方法は単純明瞭であり、次のような利点と意義がある。タイトルを筆者の主観で取捨選択せずに網羅的であること、現存するものであること(当初、新聞広告でリストを補完することも考えたが、広告されていても出版の事実が不確かなタイトルがあることがわかり、その方法は採用しなかった)、大量の書誌(所蔵)情報を扱うに際して、デジタルデータは効率的であること、といった点である。

また、現在の読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の紙面データベースを主に利用し、マルクス主義関連の記事と出版広告などを収集・調査する。

(2) 研究目的(2)については、本研究の特色はマルクス主義普及をその出版史から捉えようとする点にある。本研究課題申請時に、マルクス主義の啓蒙的出版は「乱発的な刊行」、「学習案内」、更に「教科書」、「教程」を冠した出版に移行していくとの仮説を立てており、この3つに注目して調査する。

(3) 研究目的(3)については、『無産者自由大学』と『マルクス主義講座』の出版企画を比較して、マルクス主義思想の大衆的な普及のアプローチの違いを比較・検討する。

(4) 研究方法の追加について

本研究課題に取り組む中で、申請時に萌芽的であった問題意識が明確になった。それは検閲研究の重要性である。膨大なマルクス主義の出版物をリスト化していく中で、検閲体制下でこれらの出版がなぜ可能であったのかを問う必要を感じた。そこで文学史・出版史分野での検閲研究を検討していき、本研究課題の問題意識と目的にとって、根幹的な課題であるとの認識に至った。

すなわち、検閲によってテキストが変容する以上は、刊行されたテキストとは、確固とした存在ではない。本研究課題また思想研究はテキストを基礎とするが、検閲下でのテキストを、著者の思想の確実な表出であると即断することは当然できない。筆者は、これは研究の基礎に関わる問題であると考えた。また、大量のマルクス主義の出版物の存在は、当時の発禁処分の実効性を明らかにするこ

とを要請する。

このような経過から、本研究課題の目的の達成に必要な課題・方法として、検閲に関する調査を研究計画に取り入れた。

4. 研究成果

(1) 我が国で戦前期に刊行されたマルクス主義に関連する出版物を広く採録する文献リスト「マルクス主義関連文献」を作成し、Web上で公開した(URLを後掲)。研究期間全体を通じて取り組んだこの文献リストは、合計約1800点の単行本タイトルを採録する。(ただし、同一タイトルでも初版、二版などは各1点ずつとして集計した。これは検閲による変容を顧慮するためである)。戦前期を対象とするマルクス主義文献の目録として最大の採録点数であろう。従来の文献目録(例えば細川嘉六『日本社会主義文献解説』(1932年)また同書戦後版等)は、それぞれ独自の観点で文献を取捨選択しており、網羅的にマルクス主義の出版物を採録しているわけではない。従来の研究が視野外に置いてきた文献を対象とする本研究の立場では、これまでに作成された文献目録のいずれもこの点で不十分であった。このリストはタイトルを取捨選択せずにより網羅的な収録を目指したため、従来の目録がおよそ関心を向けず採録しなかったような啓蒙書、入門書を抽出しリスト化することを可能にした。この目録は採録点数の多さによって、従来の研究の資料的な基礎と視野を広げる意義をもつものと考えられる。

(2) こうした網羅的な文献目録の作成を基礎に、マルクス主義の普及を学術と運動の二面の出版活動から追跡し、主に次の知見を得た。

マルクス主義が学術的に受容され、それが社会へと普及する位相を「教養化」として捉える本研究の視角において、その発端期の解明は重要である。まず学術面での受容として、1920年代初頭の福田徳三による『マルクス全集』刊行企画に着目し、その意義を考察した。『マルクス全集』は高島素之による『資本論』全三巻完訳で知られるが、それ以外で言及されることがない。しかし筆者は、我が国でマルクス主義が「学術の対象」であることを社会に広く知らしめた黎明期の出版とは、『社会問題研究』等の河上肇の活動とならんで、この『マルクス全集』の出版企画であると考えられる。

『全集』企画の特色は、翻訳者・編集者に学術界の顔ぶれを揃えたことにある。社会主義者は高島素之のみであり、福田徳三、左右田喜一郎、坂西由蔵、寺尾隆一、金子鷹之助、大塚金之助、村島靖雄(帝国図書館司書官)(『マルクス全集内容解説 規定及発行の趣意』大鏡閣、1919年)という学術界中心の企画であった。

もう一つの特徴は、学術的出版であること

を打ち出している大々的な宣伝であった。新聞の第一面の3分の1を占める予約募集広告が頻りに掲載された。初出は東京朝日新聞で1920年(大正9年)2月21日、大阪毎日新聞同年11月2日、時事新報同年11月13日、読売新聞同年2月24日である。さらに東京朝日新聞では1919.11.12、1920.3.17、1920.3.20、1920.3.23、1920.3.25付に、また読売新聞1919.10.26、1919.12.05、1920.3.20、1920.3.23付でも同様な広告が掲載された。これとは別途、『全集』の中心である高島素之訳『資本論』の刊行でも多くの新聞広告が掲載された。広告宣伝で特筆すべきは『官報』への掲載である。『官報』第2196号(大正8年11月28日)、第2291号(1920年3月25日)の巻末に広告が掲載された。『官報』という公的な刊行物への広告は、新聞広告とは別の意義を持ったであろう。天皇の「勅令」「御名御璽」から始まる公的な刊行物に、「危険思想」であったはずのマルクスの名が記され、人々の目に触れたのである。

このように、「危険思想」であったマルクスの名が、学術という権威を伴って人々の前に登場したのがこの時期であった。『マルクス全集』の刊行企画とは、河上肇の活動と並び、マルクスが学術の対象であることを広く世間に知らしめた最初期の出版企画であったといえるのである。こうした「学術としてのマルクス」の受容は、学術のもつ権威を背景として、「教養」という位相で社会に浸透していくものと思われる。

さらに1920年前後から、社会主義運動とは殆ど無縁な方面からマルクス主義に関する出版がみられる。それ以前は、およそ社会主義者たちの手によるものであったが、学術としてのマルクス主義の受容は、一般の関心に応える啓蒙書を求めていった。

1919年は河上肇の『社会問題研究』発刊で知られる。ただし、啓蒙書の刊行を促したもうひとつ重要な契機とは、高島素之訳『マルクス資本論解説』(カウツキー、売文社、1919.5)と松浦要訳『全訳資本論 経済学の批評 第一分冊』(マルクス、経済社出版部、1919.9)の刊行であったと考える。それは、『資本論』の翻訳と著名な解説書の翻訳が刊行されたものの、内容が一般には難解であったためである。つまり、より平易な入門書が求められた。

該当する例として『マルクスの資本論』(吉岡淡水、学芸書院、1919.11)がある。「カウツキー原著『マルクス資本論解説』を部分的に抄述したもの」(98頁)であり、概略的な『資本論』解説を意図したものである。とはいえ同書の章立ては「1 緒論、2 商品、3 価値、4 商品の交換、5 貨幣、6 労働行程、7 労働時間、8 協業と分業、9 機械、10 労働賃銀、11 資本と資本家」というものであり、「剰余価値」や「資本蓄積」の重要な術語が小見出しに置かれる。カウツキー『解説』での篇別構成に比べて『資本論』第1巻の主たる論点な

り論理の筋道が見えにくい。『通俗マルクス資本論：附・マルクス伝』（メリー・マーシー著、遠藤無水訳、文泉堂、1919.11）は、いっそう簡略なマルクス経済学のエッセンスの解説を試みたものであり、主にマルクスの『価値、価格、利潤』を参照した小冊子であった。（未見だが同じ原著者で島田安太郎訳『マルクス経済学入門』（三田書房、1919）もある）。また、マルクスの『価値、価格、利潤』は松浦要によって著者による『資本論』入門として紹介された（『マルクス経済学説要旨：マルクス著価値価格及び利潤』（経済社出版部、1919.10））。山川均訳『マルクス資本論大綱』（エドワード・アヴェリング、1919.11）は、『資本論』の要旨を簡潔に記したものであるが、『資本論』の篇別構成をそのまま残すことでその論理構成を明瞭にたどれるものとなっている。

この時期の最もユニークな入門書は、樋口麗陽『誰にもわかるマルクス資本論』（日本書院、1919.12）であろう。樋口はその著作を見る限り、社会主義思想とは無縁と思われる。同書は「全訳書や解説書などを読んでも、マルクス資本論の全体の意味の解らない人の為め」（同書、「注意」）に執筆され、次のような親しみやすい文章を特徴とする。

「鍋は...口を利いて買手に知らせることが出来ないので、貨幣といふ通辯が「鍋君の値打は私の一円と同じです」と通訳の労を取ってやるやうなものであります...」（38頁）

同書には参考文献が掲げられておらず、また篇別構成が示されないものの、目次には97項目が掲げられている。筆者の推定では、全体構成は主に高島素之訳『マルクス資本論解説』を参照し、同時期の他の解説書や松浦要訳『全訳資本論』をも参照して平易な文章で書き下ろしたものである。巻末の「マルクスの略伝」は松浦訳『全訳資本論』収録「カール・マルクス小伝」を下敷きにしたものであろう。

（3）社会主義・労働運動においても啓蒙書が刊行される。マルクス、エンゲルスの翻訳は『無産社パンフレット』などから刊行され、またマルクス主義の理論・思想とは限らない労働者向けのパンフレットも多く刊行された。また学習案内も刊行されていく（前回の科研費成果報告書参照）。1920年代には、各地で労働学校が設立され、その関連で啓蒙的な小冊子も発行された（大阪労働学校出版部など）。この関連で労働者教育の講義資料を探索したところ、時期は下るが「浅草プロレタリア学校 1930.9.25 講師田所輝明」とある一枚物の資料を収集できた。筆者はその存在を知らなかったが、小さな労働学校（講義・講演）の企画であろうか。「マルクス経済学二時間講座」と銘打ち、「一、経済学とは何ぞ？」から始め、商品・貨幣論から剰余価値論の説明で区切り、次に「マルクス経済学の実展」と題して帝国主義論で終わる。項

目のみで解説文はないが、当時のマルクス主義普及の諸相の一端を知ることができる。

1920年代半ばから、レーニンやスターリンなどの翻訳出版が精力的に進められていく。

『レーニン著作集』（レーニン著作集刊行会、1926-27年）『スターリン・ブハーリン著作集』（スターリン・ブハーリン著作集刊行会、白楊社、1928-30年）などである。この流れの中で旧ソ連の啓蒙書・入門書の翻訳出版が進められていく。それらで特徴的なことは、「教程」や「教科書」と名づけられた入門書が現れることである。以下のようにリスト化することができた（書誌情報を一部略した）

『史的唯物論の理論 マルクス主義社会学の通俗教科書』（「マルクス主義叢書」ブハリン、1927年、1928年）

『マルクス学教科書 1-9』（エス・セムコフスキー編、1927-1930年）

『レーニン学教科書 上下』（ブハーリン編、1928年）

『政治学教程 上下』（ブハリン他、1929-1930年）

『経済学教程』（レーニン、1929年、1930年、1931年）

『史的唯物論 マルクス主義社会学の通俗教科書』（ブハリン、1930年、1933年）

『レーニン主義教程 党の農村青年用初等学校用教科書並に自習書』（ヴェ・オリホーヴィ、1931年）

『史的唯物論教程』（フィンゲルト ベー 他、1931年）

『共産主義教科書 下 ロシア共産党綱領の解説』（ブハリン、1931年）

『マルクス主義経済学初歩教程 誰にも判る経済学』（ミハレフスキー、1931年）

『マルクス主義経済学教程』（イ・ラピドウス、カ・オストロヴィチヤノフ、1932年）

『マルクスレーニン主義経済学入門 資本主義と帝国主義教程』（獨逸××党プロ・カル部編、1932年）

『マルクス主義労働者教程. 経済学 1-8』（ドゥンカー他、1931-1932年）

『マルクス主義労働者教程. 国際労働運動（史）1-3』（ドゥンカー他、1931年、1932年）

『マルクス主義政治教程 1-2』（ヤ・ティーマン、1932年）

『資本論解説 マルクス主義経済学の教科書 上』（ラピドウス、オストロヴィチヤノフ、1933年 [続巻不詳]）

『価値及貨幣 マルクス主義経済学教科書 1』（ラピドウス、オストロヴィチヤノフ、1934年）

『マルクス主義経済学教程 1-4』（ラピドウス、オストロヴィチヤノフ、1935-1938年）

これらは、マルクス主義の普及が旧ソ連の強い影響下で展開される段階へと変化したことを出版史的に裏付けている。こうした啓蒙書・入門書は、もはや単なる平易な入門書といったものではない。「練習問題」が付さ

れているなど、マルクス主義の理解のための、相当程度に詳細な文字通り「教科書」というべきものが見られる。また「教科書」や「教程」といったタイトルからは、「正しいマルクス主義理解」を与える側と、それを無条件に受け入れ学ぶ側という明確な構図の存在が見て取れよう。当然ながら、前者の「与える側」には「正統なマルクス主義」としての旧ソ連の高い権威があろう。これらが、戦前のマルクス主義の隆盛の頂点（1928-1931年頃）から終焉に向かっていく際に刊行された啓蒙書・入門書の主たるものの一角を占めている。

（４）マルクス主義普及のアプローチ比較の課題については、『無産者自由大学』のほとんどの刊行物および内容見本２種の収集、『マルクス主義講座』の全巻の書誌確認および新聞広告の収集までおこなった。前者は労働者の幅広い教養を培おうとするものであり、後者は運動を意識した先鋭的なマルクス主義普及を行おうとするものであるとの認識から比較を行う予定であったが、後者を確認していく中で、発禁によって刊行が乱れていることがわかった。検閲研究の重要性を認識し始めたこともあり、次の検閲に関する調査研究を優先させた。

（５）検閲に関する問題意識は、作成した文献リストに収録した出版物の膨大さに端を発し、検閲下でそれらの出版物がどのように刊行できたのか（たとえ書誌情報と現物の刊本が存在しても、発禁・差押えによって実際には流通しなかったことも考え得る。例えば国立国会図書館所蔵の刊本は、内務省へ納本された現物が移管されたものであり、発禁となった刊本が多く含まれている。つまり国立国会図書館に所蔵されていても、市中には流通しなかった可能性がある）にある。文学史・出版史分野の先行研究の調査を進めた結果、特に浅岡邦雄と小林昌樹らの研究から次の資料の意義を見出した。

ひとつには『出版警察報』（内務省秘密資料 1928-44年、全 149号）であり、発禁処分の実効性が一定判明する。ふたつには検閲の際に使用された「検閲正本」が国立国会図書館等に所蔵されており、検閲官による検閲の痕跡が判明することである。前者については、一部ではあるが初めて社会主義出版物への発禁処分の実効性を数値で示すことが出来る。また後者からは、社会主義文献のテキストの検閲過程が判明しうることを認識した。従来の研究史では、検閲は念頭にあるものの、上記の資料は看過されている。しかしこれらの資料は、これまで回想で語られるしかなかった事実を、新たな資料的基礎の上で検討することを可能とする。社会主義出版物が戦前の検閲体制下で具体的にどのように検閲され、どの程度流通したのかは、マルクス主義の普及史研究において重要な課題だと考え

る。

以上の研究成果のうち、主に（１）（５）に関する論文を発表した（後掲）。

最後に反省と今後の展望を述べたい。本研究課題の進展に伴い、上述のように研究方法の追加が生じた。これは本研究課題開始当初の問題意識の変化とともに新たな課題の発見でもあった。すなわち、思想研究がテキストに依拠する以上は、検閲研究は史料批判の基礎として位置づけるべき課題であること、しかし従来の研究はその観点が希薄であり、重要な資料が看過されていることである。このような検閲研究の重要性の認識に至り、二年目からは、検閲に関する調査研究に優先して取り組むことになった。それは当初の研究目的の達成に必要であると考えたからであるが、他の課題に十分に取り組む点で不十分さを残してしまった。特に研究目的の（４）「マルクス主義普及のアプローチ比較」は十分に取組めたとは言えない（ただし、研究の遅延の場合には当該課題以外を優先させる旨は申請時の研究計画に記していた）。不十分さを残した課題には今後も取り組んでいくとともに、本研究課題に取り組む中で得た新たな課題 検閲と社会主義思想の普及に関する研究を進めていきたい。

*浅岡邦雄「戦前期内務省における出版検閲 -- 禁止処分のいろいろ（講演報告）」（『大学図書館問題研究会誌』、2009） 小林昌樹編『雑誌新聞発行部数事典：昭和戦前期：附 発禁本部数総覧』（金沢文圃閣、2011）

参考文献

- 石堂清倫「堺利彦と『共産党宣言』その他」（『初期社会主義研究』10号、1997）
梅田俊英『社会運動と出版文化』（御茶の水書房、1998）
大内兵衛『経済学五十年』（上・下）（東京大学出版会、1959）
大村泉「幸徳秋水／堺利彦訳『共産党宣言』の成立・伝承と中国語訳への影響」（『大原社会問題研究所雑誌』603号、2009）
大森かほる『捨石埋草を生きて 堺利彦と娘近藤真柄』（第一書林、1992）
奥平康弘「治安維持法を論ずる - 清水幾太郎「戦後を疑う」を疑う」（『世界』396号、1978）
慶応義塾図書館改造社資料刊行委員会編『改造社出版関係資料 山本実彦旧蔵：慶應義塾図書館所蔵』（雄松堂出版、2010）
小林昌樹「戦前期全出版物の形態別分類表（試案）」（『文献継承』第19号、2011）
小山弘健『日本社会運動史研究史論』（新泉社、1976）
堺利彦「共産党宣言日本語訳の話」（『労農』4（2）、1930年4月）
塩田庄兵衛「『共産党宣言』の日本語訳をめぐって」（『季刊 科学と思想』69号、1988）

清水幾太郎「戦後を疑う」(初出『中央公論』93(6)、1978)
玉岡敦「『共産党宣言』邦訳史における幸徳秋水／堺利彦訳(1904, 1906年)の位置」(『大原社会問題研究所雑誌』603号、2009)
中村俊輔『治安維持法』(中公新書、2012)
永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部、2001)
永嶺重敏「円本の誕生と「普選国民」」(吉見俊哉、土屋礼子編『大衆文化とメディア』、ミネルヴァ書房、2010)
千代田区立千代田図書館『千代田区立図書館蔵「内務省委託本」関係資料集』(同図書館発行、2011)
橋本直樹「日本における『共産党宣言』の翻訳-影響史について」(『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』47号、2006)
山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、1981)
由井正臣他『出版警察関係資料解説・総目次』(不二出版、1983)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

久保誠二郎「『共産党宣言』は人々の手に渡ったか 昭和初期の事例の考察」研究年報「経済学」(東北大学)74(1) 査読あり、431-449頁、2014年

〔その他〕

ホームページ等

「戦前日本のマルクス主義文献」

<http://www.ric.hi-ho.ne.jp/jlme/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 誠二郎 (KUBO, Seijiro) 東北大学・
経済学研究科・博士研究員
研究者番号：80400216